様式２

令 和 元 年 度　　自 己 評 価 表　【中 間 評 価】

鳥取県立鳥取緑風高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	1　基本的生活習慣の確立による、生徒の自己管理能力の育成 2　夢と希望を持ち、世界を広げていくことのできる生徒の育成 3　社会のルールやマナーを遵守する生徒の育成 4　基礎・基本の重視による、生徒一人一人の学力の向上 5　生徒が将来の生き方を意識する進路指導の充実 6　自律性を伴った、生徒の自主性の育成 7　自然環境について考え、行動することのできる生徒の育成

今年度の重点目標	1　基本的な生活習慣の定着を促す。 2　生徒が目標を持ち主体的に取り組む授業つくりに努める。 3　個々の生徒の課題に向き合い、自立と成長を促す指導の充実に努める。 4　視野を広げ、他者と協力する体験活動の充実に努める。

年度当初					評価結果（９）月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過･達成状況	評価	改善方策
基本的な生活習慣の定着	生活の自律	○昨年度の定時制昼間部ライフスタイル調査では、就寝時刻が午前１時以降の生徒が４０％と多く、平日の睡眠時間が十分であると評価した生徒は３９％であった。スマホ等のメディア利用平均時間は平日５．３時間と依存度は高い。自由記述には、早寝早起きしたい、睡眠時間を増やしたい、ゲームの時間を改善したい等、生活習慣の課題を自覚している生徒もみられるが改善に至っていない状況がある。 ○朝食をとっている生徒の割合が５５％にとどまる。家庭の協力も得て生活リズムを整える必要がある。 ○身体的および心的な健康管理が苦手であったり、関心が低い生徒がいる。 ○挨拶をはじめとして、コミュニケーションが苦手な生徒がいる。 ○整理整頓や衛生管理が苦手な生徒がいる。	○時間を守り、規則正しい生活時間を過ごすことができる。 ○健康管理に関心を持ち、健康状態の向上に努めることができる。 ○挨拶を交わし、身だしなみを整えることができる。 ○身の周りの美化に配慮し、整理整頓（清掃、ロッカー整理）ができる。	○学業を中心とした健康的な生活を送るために必要な生活習慣について、振り返りをさせるとともに具体例（起床・就寝時刻、睡眠時間、歯と口の健康の保ち方）を提示する。 ○健やかな生活習慣を確立する具体的手立てを考えさせたり、実際に行ったりする場面を設ける。 ○生活習慣の改善について保護者と連携して働きかける。 ○積極的な挨拶や声かけ、丁寧な面談を通して良きコミュニケーションの具体例（対人関係における挨拶ことばや対話）を提示し、習慣づけを働きかける。 ○ロッカー内チェックと整理指導を行う。	○時間を守ることについて、様々な場面での指導により効果があった。一方、利己的な言動をする生徒も若干いた。 ○長期休業前にはロッカー内チェックと整理指導を行った。日常生活においては校舎外や目の届きにくいところでのゴミが目立った。 ○定時制ライフスタイル調査では、就寝時刻が遅い傾向はあるが、睡眠時間は適正である。しかしながら、スマホ等のメディア利用時間が平日５時間以上の生徒が６４％と依存度は高いままである。 ○歯と口の健康では、歯みがきを１日３回以上する生徒が１０％増加した。 ○歯科検診結果を昨年と比較すると、治療が必要なむし歯のある生徒が、全ての部課程で減少した。 ○定時制昼間部において、睡眠・歯と口の健康についての保健教育（集団・個別）を実施した。 ○保健だよりや掲示物により、健康管理に関する情報発信に努めている。	C	○基本的生活習慣の定着・自立に向けて、より一層の声かけ・注意喚起等に努める。 ○長期休業前以外でも様々な機会を捉えロッカー等の整理指導を行い、身のまわりの美化に配慮できる指導を継続していく。 ○保健だよりや掲示物等により、生活の改善や健康に関する意識の向上について情報発信を継続する。
生徒が目標を持ち主体的に取り組む授業つくり	個に応じた学力の向上	○目標を持って真面目に授業へ取り組み、基礎学力を高めている生徒もいるが、様々な要因により学力や授業に臨む姿勢の差が大きい。また、学力が向上したと実感している生徒が少ない。 ○定時制の単位修得率は６１．３％と昨年度比で微増した。 ○通信制の単位修得率は全国平均を上回る水準であった。	○社会生活を営むために必要な基礎学力を養成する。 ○上級学校の入学試験や就職試験に対応できる学力を養成する。 ○「授業は工夫されていてわかりやすい」の肯定的な生徒の回答率が８０％以上である。 ○選択した科目を欠席しない環境を醸成する。その結果、定時制生徒の単位修得率は６５％以上、通信制生徒の単位修得率は７０％以上である。	○授業を工夫・充実させるとともに、まなトレ・課外指導を実施したり、校外模試を活用したりする。 ○毎日の声掛けや個別具体的な支援、教員間の情報交換によるきめ細かい指導を行う。 ○ＩＣＴを活用することで、自分の弱点に応じた個別学習を充実させる。 ○学生教育ボランティア（緑風ソシオ）により学習指導補助を充実させる。	○「まなトレ」（基礎力定着指導）は真面目に集中して取り組む生徒が多く、教え合う様子も見られている。 ○学習意欲の低い生徒も見られるが、生徒の様子・反応をふまえ、一人ひとりに合わせた発問や、達成感が得られるように授業を工夫している。また、特別支援教育支援員とも協力し、きめ細かい学習指導を行っている。しかしながら、反復学習が不足し基礎学力の定着、向上に繋がりづらい。 ○ＰＣやタブレットによる個別学習を授業やＬＨＲで実施している。 ○緑風ソシオは学生３名の授業支援により、生徒の学習意欲が向上している。 ○「授業は工夫されていてわかりやすい」の肯定的な生徒の回答率は７８％で前年同期より６％増加した。 ○課外指導、校外模試は希望者に実施しているが、明確な目標を持ち、意欲的、計画的に継続できる生徒は少ない。 ○単位修得率については、定時制、通信制ともに目標を達成した。	B	○一人ひとりの生徒の特性の理解と、効果的な支援を検討し、適切な支援に努める。 ○多様な生徒がより授業に参加しやすくなるよう、授業のユニバーサルデザイン化を一層工夫する。 ○授業内容の精選を行い、引き続き授業の改善・工夫に努めると共に、到達度の確認方法などを検討する。 ○緑風ソシオに参加する学生をさらに募集する。 ○日々の授業を通しての反復、長期休業中の課題等による反復により、基礎的事項の定着を図る。
	意欲向上と自信づくり	○進路意識の高揚が見られている。昨年度アンケートでは卒業後の進路を具体的に考えている生徒は全体で６３％と過半数以上であった。また、進路準備のために何か始めていることがあると答えた生徒は５２％であった。 ○教職員の工夫により、学習意欲の向上が見られた。しかしながら、一部自信がなく将来の希望が持ちにくい生徒もおり、応募先、受験先が決まらないなど苦戦した。	○進路意識を喚起し、勤労観・職業観を養成するとともに進路目標が明確となる。 ○各種資格試験、検定等に１人１受検を目指す。 ○高校生活が全体的に満足していると感じている生徒が、定時制では６５％以上、通信制では７５％以上である。	○「勉強＋α」を推進する　（α：資格取得等）。 ○各種資格試験、検定のきめ細かい案内。適性のある生徒に対して、個別に受検を勧める。また受検者には個別の支援を行う。 ○特別支援教育支援員が、授業のサポートを行うことで、学習意欲の向上につなげる。	○検定資格取得の案内をしているが、自信のなさ、意欲不足からか挑戦する生徒は少ない。 ○生徒一人ひとりの事情や適性に応じた進路指導を行い、より的確な支援を受けることができるように努めている。 ○特別支援教育支援員による授業のサポートや授業時間以外での声かけ、質問に対する説明等を行う場面をつくり、生徒の学習意欲の向上や基礎学力の定着に努めている。 ○高校生活が全体的に満足していると感じている生徒は、定時制は目標に達しなかったが、通信制は達した。	C	○資格取得、検定への受検について、入学当初より意識づけをする。また、検定取得の意義やメリットなどを発信する。 ○個々の生徒の適性や進路目標に応じて、資格や検定の案内を行う。 ○進路に関する情報の発信を増やし、進路実現に向けて意欲喚起を図る。 ○一人ひとりの生徒を多角的に理解して支援するように、教職員とＣＡとの情報交換や連携をより密にする。
個々の生徒の課題に向き合い、自立と成長を促す指導の充実	生徒の内面を理解しそれを生かした指導	○担任をはじめ、ＳＣ（スクールカウンセラー）やＳＳＷ（スクールソーシャルワーカー）、養護教諭による日常的な個人面談やカウンセリングが定着している。 ○入学前不登校であった生徒のうち、半数以上が改善している。 ○不登校対応など生徒支援が多様化しており、生徒理解を踏まえた校内支援体制の一層の充実が必要である。 ○関係職員が連携をとり、生徒の実態を把握するよう努めている。	○生徒情報を共有し、関係職員間で連携をしながら個々の生徒の発達課題に応じた具体的かつ現実的な支援を実行している。 ○全生徒に対し、担任等による面接を年間３回以上実施する。 ○入学前不登校（年間30日以上の欠席）であった新入生徒の状況が改善し、出席状況が前年に比べて向上している。 ○「質問や相談に丁寧に応じてくれる」と回答した生徒の割合が８０％以上である。 ○生徒の実態把握のための業務が効率的である。	○担任などによる個人面接や日常会話など多くの機会や様々な場面をとらえ、生徒一人ひとりとのかかわりを大切にした指導に努める。 ○教育相談係会を隔週、SC・ＳＳＷ連絡会を毎月持つことによって、個々の生徒に対する具体的な支援策を策定し実行に移していく。 ○校内支援委員会を活用した組織的な支援により、各部課程をこえた情報共有と個別支援ケースの進捗状況を把握・検討する。 ○医療機関などの各種外部専門機関と連携した支援体制を充実させる。 ○効率よく業務を推進するよう関係職員と連携する。	○全員の生徒への声掛け、面談等を実施し、生徒理解に努めている。 ○各部課程・学年ごとの生徒情報交換と、ＳＣ・ＳＳＷ連絡会を実施し、生徒理解および対応策について共通理解をを図っている。 ○個別支援ケースについて全職員で共通理解を図っている。 ○「専門医による相談会」を実施し医療機関との連携を図っている。 ○「質問や相談に丁寧に応じてくれる」と回答した生徒の割合が８５％であった。	B	○ＳＣ・ＳＳＷ連絡会などで今後も定期的に部課程間で情報共有する機会を持つようにし、校内外の連携を密にしていく。 ○不登校傾向の生徒については、引き続き関係職員と連携をとりながら改善に取り組む。
	自立をめざす生徒指導	○７９％の生徒が、ルールやマナーを意識した行動をとるよう心掛けているが、その改善が見られたのは６１％であった。昨年度と比較し数値の向上が見られたが、社会的規範を身に付ける必要性を感じつつも行動に移すまでに至っていない状況が見られる。	○進路意識を喚起し、勤労観・職業観を養成するとともに進路目標が明確になる。 ○ルールやマナー向上の指導をとおして、お互いを思いやる心や自律性と自主性が身についている。 ○ルールやマナーを意識した行動をとるよう心掛けている生徒の割合が８０％以上である。	○進路ガイダンスや進路ＬＨＲ、ＣＡ（就職支援相談員）面談等で自己理解を深めさせ、キャリア設計能力や社会性を育成する。 ○声掛けや挨拶を交わし、言葉遣いや行動等に十分に気を配らせる。 ○規範意識が身に付くように様々な体験活動を取組む。	○様々な場面を捉え指導するなかで、挨拶を交わす生徒が増え、お互いを思いやって過ごすことができている。 ○ルールやマナーを意識した行動をとるよう心掛けている生徒の割合が８４％と高く、規範意識が高まっていると感じられる。 ○就職活動中の生徒は、様々な進路行事への参加を通じて、徐々に言葉遣いや行動に改善がみられる。ＣＡ面談等により自己理解も進んでいる。必要な生徒については、教育相談やハローワーク等の外部機関とも連携し、きめ細かい指導を心がけている。	B	○今後も粘り強く、声かけや個々に応じた指導をしていく。 ○その他の生徒に対しても、社会体験の機会や進路について考える機会を増やしたい。
視野を広げ、他者と協力する体験活動の充実	体験活動の活用	○社会体験等、様々な生活体験が不足している生徒が多いため「※はすわらクラブ」をはじめとする体験活動を多く取り入れている。その結果、意欲的に活動する生徒も見られた。 ○各種行事において、生徒会の生徒が中心となり企画・運営を行うことが出来つつある。 ○保護者アンケートから、やりたいことを決めて行動できるとの回答が６５％であり、積極性も備わりつつある。	○部活動やアルバイト等の体験活動に取り組む生徒が年次を追うにつれ増える。 ○生徒会の各種委員会が活発に活動し、各種行事を主体的に計画立案している。 ○環境目標を達成するための具体的実践を全校で進め、省資源・省エネルギー・ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）に関する意識が高まる。	○「勉強＋α」の推進（α：部活動、生徒会活動、アルバイト、インターンシップ、ボランティア等）。 ○委員会の活動内容を示し、生徒会執行部が中心となり、各種行事を主体的に企画運営できるように支援する。 ○「環境管理システム（ＴＥＡＳⅡ）」を適切に運用していく。環境美化に配慮した実践、エコ活動の推進、環境に良い取り組みとして、教職員全員が率先してエコ活動を実践していく。	○生徒総会や球技大会は、企画・運営を生徒会の生徒が中心となって行うことができたが、各種委員会が活用できていない。 ○県定通体育大会への出場人数が増え、軟式野球・男子バレーなど昨年度不参加だった競技も出場した。 ○環境目標はおおむね達成できた。 ○「勉強＋α」の推進について、初めて社会参加する生徒もおり、一定の成果を得た。	B	○緑風祭や学校行事等で、生徒同士が話し合ったり、協力して活動できる場面をつくる。 ○各種委員会の役割を生徒に分かりやすくし活動しやすい環境をつくる。 ○「勉強＋α」について、担任と連携し、必要な生徒に個々に参加を促したい。特に低学年での挑戦を推奨する。また、失敗も含め受け入れ可能な企業の開拓を行う。 ○ＴＥＡＳⅡの適切な運用を継続する。
	集団への適応力の育成	○高校生活を通して充実した日々を送っている生徒もいるが、人間関係作りや集団活動が苦手なため授業や学級活動、生徒会活動等への参加が消極的になりがちな生徒もいる。 ○全校生徒の７０％が、学校生活において居場所や安心の材料があると感じている。 ○不登校傾向の生徒が一定数いる。	○生徒が授業や学級活動、生徒会活動、学校行事等に積極的に関わろうとする姿がみられる。 ○年2回実施するhyper-QUの「学級満足度尺度」、「学校生活意欲の結果」において、改善がみられる。 ○「学校に居場所や安心の材料がある」と回答した生徒の割合が７５％以上である。	○担任とＳＣ、ＳＳＷとの協力によって家庭訪問や校外専門機関との連携を強化して、生徒の人間関係作りを支援する。 ○ひきこもり傾向の生徒に対しても、定期的な家庭訪問等の適切なかかわりを粘り強く継続する。 ○hyper-QUや生徒実態把握の結果を生徒面接やクラス経営に積極的に活用する。	○担任、学年団、養護教諭、ＳＣ、ＳＳＷ、生活指導部、教育相談部が連携し、保護者連絡をこまめに行い、連携を密にしながら生徒指導に取り組んだ。 ○ＳＣの１年、２年生対象定期面接実施、ＳＳＷの校外機関への訪問・連携、担任の家庭訪問同行等を実施。 ○生徒面接前にhyper-QU研修を行い、結果をクラス経営に活用できるようにしている。 ○「学校に居場所や安心の材料がある」と回答した生徒の割合が６５％であった。 ○ユニバーサルデザインを取り入れ、学習環境を整えている。	C	○引き続き、校内外で連携を取りながら、情報共有し、生徒個々と集団の両側面から学校生活への適応が図れるようチームでの指導・支援に努める。 ○転編入生や前期長欠の生徒については、後期開始後できるだけ早期に担任・ＳＣ面談を実施する。 ○保護者懇談、生徒面接などにもＳＣ・ＳＳＷ・教育相談部も入り、担任との連携をさらに密にする。 ○日頃の声掛け、あいさつ等を通して生徒の実態把握に努める。 ○引き続き、授業や教室のユニバーサルデザイン化に努め、居心地の良い環境整備を目指す。

※ はすわらクラブ:学年の枠を超えた多様な体験活動

評価基準　A：十分達成(100%)　B：概ね達成(80%程度)　C：変化の兆し(60%程度)　D：まだ不十分(40%程度)　E：目標・方策の見直し(30%以下)